

研究の成果

(1) 道徳授業の充実

児童自身の体験や活動に沿った発問、資料の内容や話し合いの方向がわかる板書、体験を生かしたり、次の活動へつなげたりすることができる導入や終末、自由な発言を支えるコミュニケーションタイム、それぞれが本音で命について語り合う道徳の授業を展開する上で有効であった。

外部講師による研修会では、道徳の研究授業後の研究協議会を参加型のワークショップ形式で行った。

研究協議会では、観点を明確にして「教師による語りやさし絵、キーワードカードなどが、児童に興味・関心をもたせ、主人公の心情を考えるのに有効であったか」「中心発問が命を大切にしよう（ねらい）とする意識を高めるのに有効であったか」などについて協議した。その中で、資料を語りやさし絵で行う方法は、



ワークショップによる協議会

とても有効な手段であること、中心発問からねらいに迫る補助発問や切り返しの発問が大切であることなど、多くのことを学ぶことができ、授業力向上につながった。

(2) 道徳の授業と他の教科や領域との関連（児童の変容）

他の教科や領域における体験活動と道徳の時間とをより密接に関わらせることにより、子どもたちは「自分事」として命の問題に向き合うことができた。各学年の成果は、次の通りである。

1年生では、母親に対する思いを色で表現したり、成長の様子を連続写真で観察したりすることが、価値について豊かにイメージするための手がかりとなった。授業後、「最近、お手伝いをよくしてくれるようになりました」という保護者からの手紙が届いた学級があった。友だち同士のトラブルも自分たちで解決できるようになり、教室の中が穏やかになってきた。

2年生では、学活の時間に養護教諭とのTTによる生命誕生の学習を行い、自分の誕生について知りたいという気持ちを高めた。その後の道徳授業では、主人公の気持ちに寄り添い、命のすばらしさについて自分の思いを話すことができた。教室では、自分の周りにいる人を意識するようになり、お世話になった人へ感謝の手紙を届けたり、友だちの気持ちを考えて行動したりする姿が見られた。

3年生では、チョウを育てる学習を通して、すべての生き物に命があることを実感した。道徳の時間には、小さな生き物への思いやりや命は対等であるという考えを発表することができた。「助けられてうれしかったことは何か」「事件や事故のニュースを聞いた時どう思うか」という質問に対して、授業前には「忘れた」「気にしない」という回答をした子が、授業後は「〇〇さんが保健室へ連れて行ってくれた」「どんどん人が消えていってしまう」と答えていた。人との関わりの中で命を大切にしようとする意識の高まりを感じた。



道徳の授業と関連づけて

4年生では、「居住地交流会」→「福祉実践教室」→道徳の時間→「居住地交流会」のように活動の前後に道徳の時間を設定した。活動の中で生まれた、命のつながりへの気づきを道徳の時間に価値として自覚したり、命を大切にする思いを活動の中で生かしたりする姿が見られた。その他、命の授業として、助産師中野紀子さんから出産の苦労話を聞き、また赤ちゃんを抱いたり、妊婦の疑似体験をしたりして、一人一人かけがえのない存在であることを認識できた。



福祉実践教室

5年生では、学習発表会の場で、道徳の時間に学んだ生命尊重への思いを群読や劇の形で広く発信した。自分の体験をもとに、かけがえのない命について強く自覚する機会をもつことで、これからの自分の言動に生かそうとする意識が高まった。読書タイムに、体や心に関連した図書が多く読まれたり、群読の台詞を使って自分たちの行動を振り返り、友だちと笑い合う姿が見られたりした。



学習発表会

6年生では、道徳の時間を自分の行動を振り返る場と位置付けた。一生懸命取り組んだ体験を根拠にして道徳的価値を追求することで、生命の尊さについて改めて実感し、これからの生き方を考えようとする意識が高まった。不登校の友だちを温かく迎えたり、友だちの行動を肯定的に受け入れたりして、教室全体に違いを尊重し合う雰囲気生まれた。

おおぞら学級では、なじみのあるアニメキャラクターを使って寸劇を行い、問題意識の掘り起こしを図った。気持ちを言葉で表すことが難しい子どもには、表情マークが有効であった。振り返りの段階で自分のよいところに気付かせ、自信をもってこれからの行動を考えるように励ましている。

(3) 掲示物

「生きているって」葉祥明さんの詩を紹介し、「生命を大切にする心」が育つよう、視覚的に訴えることができた。



図書室前の掲示板